仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第 20 地点の発掘調査

2026 年 11 月 14 日

東北大学埋蔵文化財調査室

1. 調査要項

遺 跡 名　仙台城跡　（宮城県遺跡登録番号 01033）

所 在 地　宮城県仙台市青葉区川内 41　東北大学川内 1 団地構内

調査原因　東北大学 (川内 1) 川内総合研究棟（仮称）新営工事

調査主体　東北大学

調査担当　東北大学埋蔵文化財調査室

調査面積　1,370㎡

調査期間　2026 年 3 月 1 日～ 12 月 25 日

2. 調査に至る経緯

「東北大学（川内 1）川内総合研究棟（仮称）新営工事」は、東北大学の国際卓越研究大学としての体制強化計画の実現に向け、新たな研究体制を確立し、全学的な研究・教育活動の拠点を整備することを目的としている。新営される建物は大規模なものとなることから、建設工事に伴う埋蔵文化財への影響が避けられず、発掘調査の実施に向けた計画を策定する必要があった。

今回の工事予定地では、これまで埋蔵文化財調査室による本発掘調査が実施されておらず、地下の遺構や土層の状況は不明であった。このため、2025 年 8 月 18 日から 9 月 9 日にかけて、約 55.6㎡の試掘調査を実施した。その結果、近現代の盛土が厚く堆積しているものの、その下部には近世以前の土層が残存していることが明らかとなった。この成果を踏まえ、工事予定地において全面的な発掘調査を実施することとした。

3. 調査地点

今回の工事予定地から南東約 70 ｍの地点では、1993 年度に保健管理センター新営工事に伴い、仙台城跡二の丸地区第 12 地点（略称：NM12、第 1 図①）の発掘調査が実施されている（『東北大学埋蔵文化財調査年報』11、1999 年刊行）。この調査では、19 世紀代の仙台城二の丸北側の堀や、それを横断する堰状遺構などが確認された。また、堀を埋めた土層からは、近代の遺物が大量に出土している。

また、東約 120 ｍの地点では、2021 年度に北キャンパステニスコート芝張替その他工事の一環として、更衣室新営工事に伴う仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第 18 地点（略称：BK18、第 1 図①）の発掘調査が実施されている。この調査では、近世の井戸や近代の建物跡などが確認されたほか、基本層序において土石流の影響を受けたと考えられる土層が認められた。このことから、周辺地域は古くから青葉山方面から流下する雨水などの影響を強く受けていたと推定される。

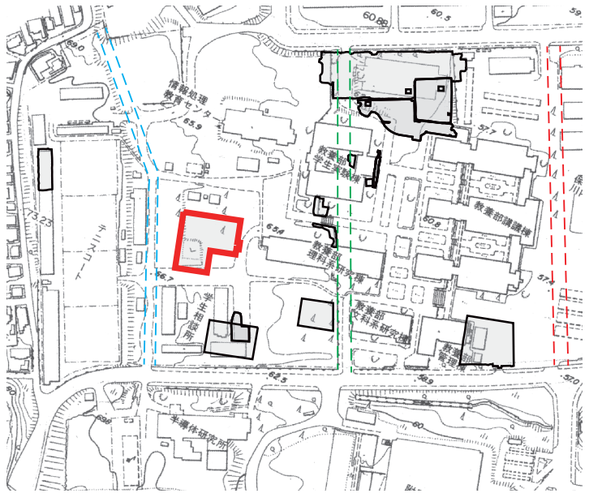
今回の調査地点は、NM12 地点の調査成果などから、仙台城二の丸北側の堀より北方に位置する武家屋敷地区に含まれると考えられる。しかし、これまでこの地では本発掘調査が実施されていなかったため、屋敷地の具体的な利用状況や地下の遺構の残存状況などは不明であった。このため、今回の調査は、川内北地区における近世の土地利用の状況を明らかにする上で、重要な成果をもたらすものと考えられる。

4. 調査成果

これまでの調査では、柱穴や溝のほか、沢状遺構、井戸、池跡と推定される遺構などを確認している。特に、水に関わる遺構が多く認められることが特徴であり、今回の調査地点は武家屋敷地の中でも、屋敷の裏手にあたる場所であった可能性が考えられる。

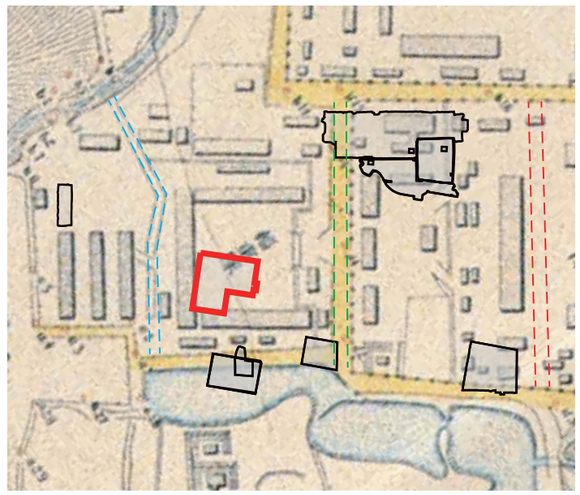
また、調査区南側では、大規模な遺構を確認している。現在も調査を継続しているが、その規模や埋土の状況から、池跡である可能性が考えられる。こうした遺構の性格や相互の関係を検討することで、武家屋敷地における土地利用の実態が明らかになるものと期待される。

さらに、沢状遺構の壁面などでは、縄文土器を包含する土層を確認した。このことから、近世の遺構面よりも下層に、縄文時代の遺物包含層が残存していることが明らかとなった。今後は、近世の遺構面の調査終了後、さらに掘削を行い、下層の状況を確認するとともに、縄文時代の遺構や遺物の分布状況について調査を進める予定である。



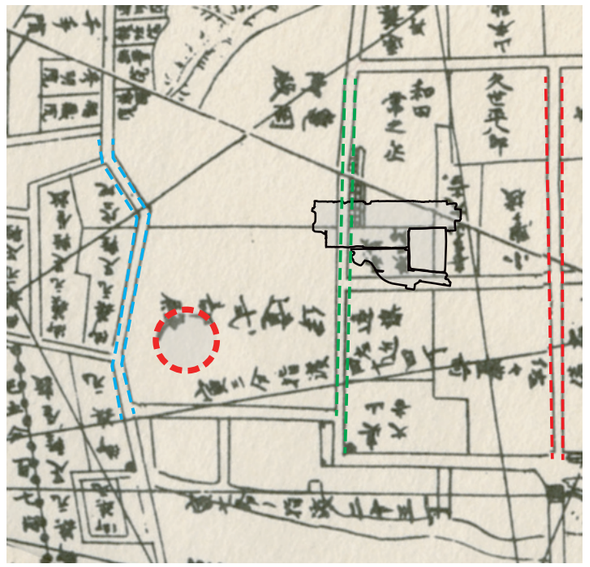
①これまでの調査地点

点線で、近世の道路の推定位置を示した。緑は大堀通、赤は裏下馬通。今回の調査区は青と緑の道路の間に収まる。



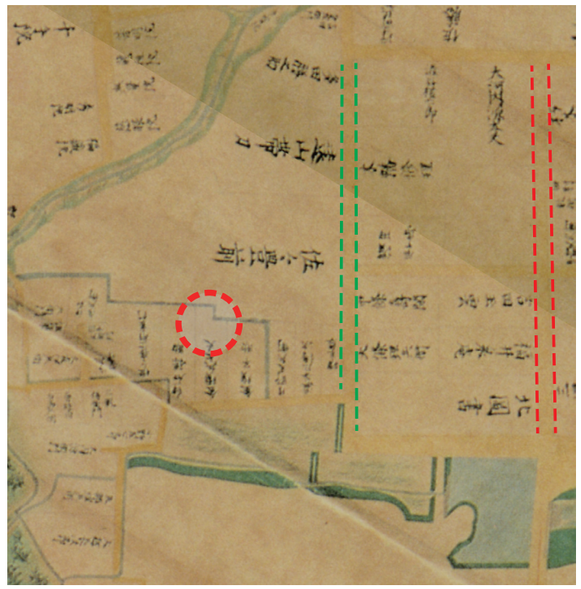
②1893（明治 26）年

現代の地図の精度とは異なるため、①とは距離感等が異なる。調査区はおおむねの位置を示す。道路の形が現在とは異なる。



③1856 ～ 1859（安政 3 ～ 6）年

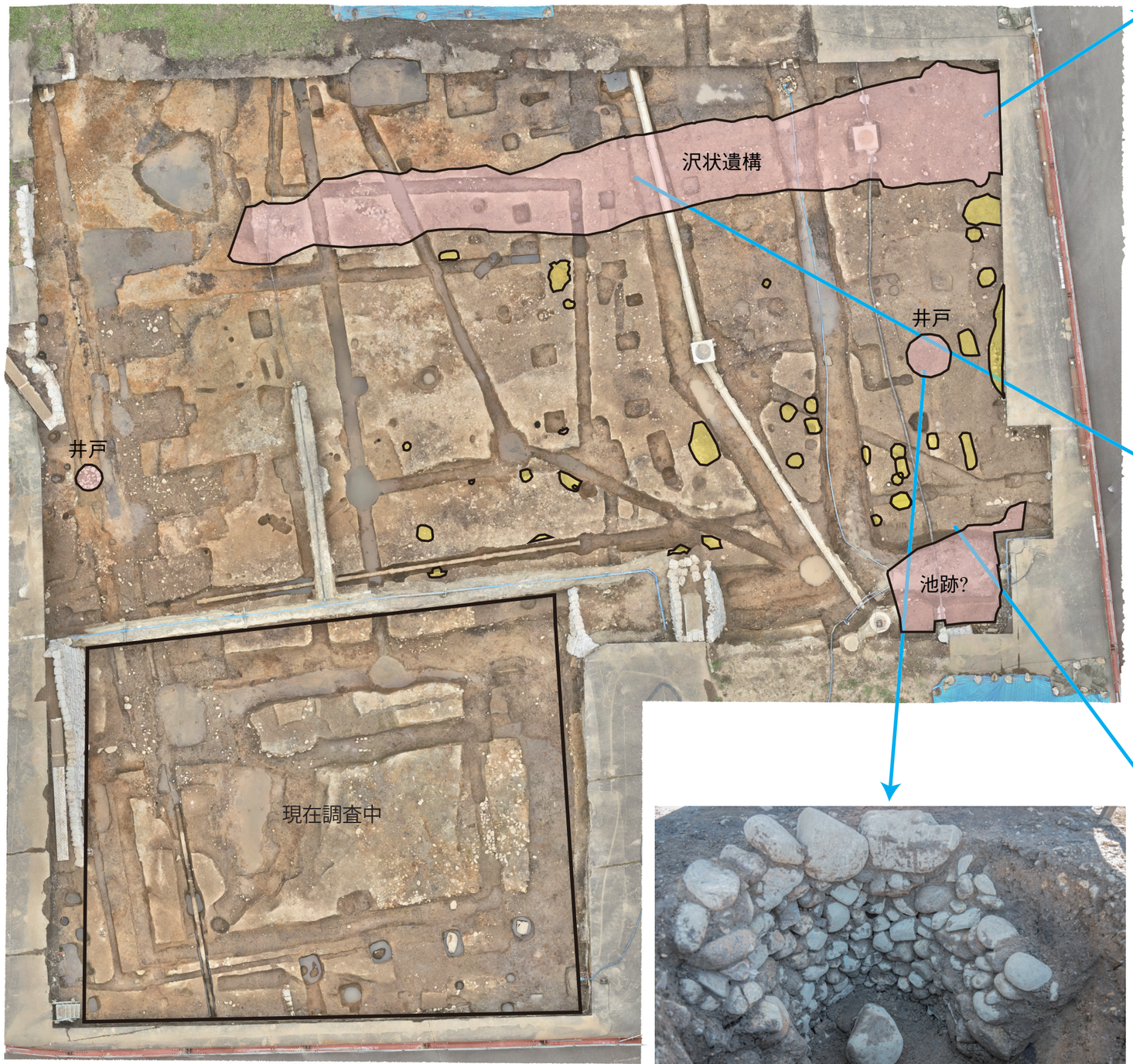
伊達式部殿（伊達邦孚 : 宮床伊達家、一門、807 貫文）と記載された範囲内に収まる。絵図内の調査位置を推定するためには、調査終了後に整理作業が必要なため、点線で調査区を示した。



④1691（元禄 4）年

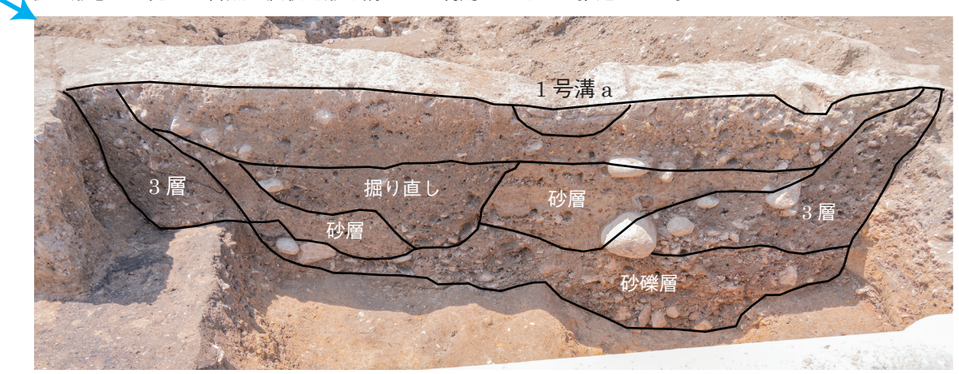
北側は佐々豊前（着座、303 貫文、奉行職）、南側は細かく分割され金須兵太夫（虎間、70 貫文）等と記載される。

第 1 図　調査区の位置





沢状遺構は、1号溝として調査を始めた。最上部に浅く細い溝があり、それを1号溝aとし、それ以下を、1号溝bとして調査をした。1号溝bの埋土2層は、人為的な埋め戻し土である。その埋土からは、18世紀前葉までの遺物が出土しており、その時期に埋め戻されたものと推定される。この沢状遺構は、その規模と形態から元々は自然の沢状地形を溝として利用したものと推定される。



沢状遺構の中央部付近では、溝を掘り直した跡が認められた。この沢状遺構は、流水の影響により砂・砂礫により埋まりつつも掘り直し、溝として継続的に利用していたものと推定される。

井戸跡は、裏込めがほぼ無い簡素な構造である。上部の大きな石は、崩れないように押さえの役目があったものと推察される。中央部に大きな石が見えるが、その最上部の石が転落したものと考えられる。



写真に写る土層は、ほぼ全てが近世の人為的な盛土である。調査区は、西側から東側に傾斜するような地形と推定されるが、その低い部分に盛土し平坦にした。間に見える黒色の土層は当時の地表面と考えられることから、一気に全て盛土をしたものではなく、時間をかけて何度かの盛土を行ったものと考えられる。

第2図　現在までの調査成果